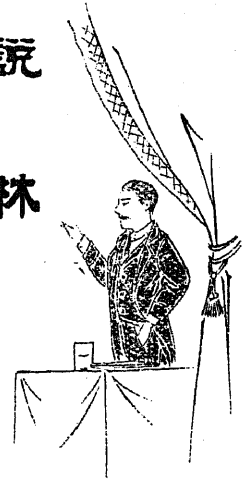

說林

女子教育談

嘉納治五郎

一体男と女といふものは、較べて見ると頗ふる違ふ點がある。先づ第一に男は、子を產まないが女は子を生む、從つて身体の具合も、女は男と違つて子を生む樣に出來て居り、男は乳が出ないが女は乳が出る、そこで以て本來女は其乳で以て子供を養育して行く樣に出來て居る。尤も今日では牛乳で育てゝ行く樣なこともあるが、母親の乳がよくさへあれば、母乳で育てるのが本來である。

だから女といふものは、本來家庭に居つて子を育てゝ行くといふのが天職である。即家庭に居つて內政を整理し、子供を教育して行くのが役目である。併し悉くの女が皆そうすべきだとは云はぬ無論多數の中では醫者になるのも宜からう、教師になるのもよからう、其他それ〳〵公役に付くのもよからう、殊に教師などは最も適當したものだらうと信じる。けれども大体からいふと女といふものは、多くの點に於て家庭に於て働く樣に出來て居るのであるから、家庭の仕事をするのが、本來だと思ふ。即家庭に在つて內事を整理し、夫が外に出て働く時に、內顧の憂なからしめると同時に、夫が外に在つて、思ひ屈して歸つてでも來た時などは、夫を勵まして更に新しい知惠を授け工

夫を與へてやるといふ樣でなければならぬ。

そうすると、人は、女といふものは一向つまらぬもので、少しも獨立的に價値のないものであるたゞ夫を助ける丈で自分で働く事がないのだから、まことに低い位置の者だと考へるかも知れないが、夫は大變な間違である。夫の非常な働が、其爲に出來るのだと思へば、すぐ分る咄しである、例令ば、心理學の助けで教育學が成り立つて居るからといつて、誰も心理學が日蔭にあつて價値がない、獨立的の位置のないものだとはいはないと同樣である。

從つて家庭にばかり居るのだからといつて、男が女を奴隷の樣に見る樣なことは無論出來ぬ。夫は、何方が上かといふと男は家長として上に立つ、其理由は、何人でも男の方は強い、身体の組み立てにしても男が強いし、腦力の働きにしても勝つて居る。だから男は女の上に立つのは普通であるたゞ女は弱いから、そこで以て男は之を助けてやらねばならぬ。女は脊が低いだから、物を見る時などは女を前にやつて自分は後に立つ、道を歩くにも男は強いから女の爲に重い物を持つてやる、車が一臺しかなければ自分は歩いて女を乘せてやる。そこが卽昔と違ふ所なので、昔風で見ると、男が強いからといふので、何でもこんな事は女にさせて男はたゞ懷手で以て歩くといふ樣なのであつたが、今日は夫では行かぬ。

女の方から考へても、こうなるのが得である、何も男女同權などと男と肩を幷べて對抗するにも及ばぬ、咄しなので、試みに一家の中に主人と同じ樣な者が二人あるとすれば如何、丸つきり治ま

りかつくものでない。だから一家の治まりを付けるには、どうしても、こうでなければならぬ。のみならずこうなると一方から見れば反つて女の方がエライのかも知れぬ。男は始終外に出で丶働く女は内に居て參謀になるといふのだから、言はゞ、男が女の手先きとなつて働く樣なものである。

これで以て見るも、女といふものはどうしても學問がなくてはいかぬ。夫が家に歸つて相談をする、すると女は夫に向つて或る知慧を授けねばならぬのだから、無論男ほど專門的に深い學問といふのではないが寧ろ廣い關係に於て夫の職業に關する智識といふものを。十分持つて居らんければならぬ。

そこで女子教育といふものも、大体右の樣な方針で進んで、到底は男子と同等の程度まで進めんければならぬ。勿論今日まで甚だ低い程度に在るものを今俄に高くするといふ譯には行かぬ。併し漸次と其歩を進めて行くべきものだと考へる。

上は過般嘉納生先が記者に語られたる意見の大要なり。校合を經たるにあらざるを以て、文字の誤は筆者の責と知られたし

ニューイングランドの一家庭

松本亦太郎

一とつぶの種子が地に落ちると芽が出る、其芽が段々成長して松や杉のやうな棟梁の材になるかならぬかは、其種子の中に具有されて居つた本來の性質と、其種子が落ちた處の外圍の境遇＝即ち土地の肥瘠、日光の流通、空氣の否良、水分の多少＝とにより定まつて來るのである。一の家庭が